

公共図書館におけるリテラチャー・サークルの実践と評価

長岡 優

IFLA の児童図書館サービスのためのガイドライン（2007）によれば、子どもたちが読書能力を身につけるように支援し、子どもたちを対象とする特別のイベントを行うことの重要性が示唆されている。しかし、今日公共図書館における読書活動は、ブックスタートや読み聞かせなど本に親しむものがほとんどであり、読書中や話し合い中において重要なことや新しいことに対する気づき（以下読みにおける気づき）の獲得に繋がるものは少ない。そこで、本研究では、読みにおける気づきを得る学習指導方法として、リテラチャー・サークルを公共図書館で行うこととした。リテラチャー・サークルとは、3～5人の少人数グループで役割（イラストレーター、クエスチョナーなど）に分かれて同じ本を読み、質問や討論を通して読みを深めていくとされている読書活動である。

本研究の目的は、第1に公共図書館向けのリテラチャー・サークルの新しいプログラムを作成、評価すること、第2に新しく作成したリテラチャー・サークルのプログラムが読みにおける気づきに効果があるかどうかを検討することである。

牛久市立中央図書館においてワークショップの形式を用いて小学校4年生4名を対象に実践を行った。今回用いた役割は、優れた表現などに光を当てるリテラリールミナリー、疑問を見つけるクエスチョナーの2つである。また、最後のまとめとして、全員で浮かんだ情景などを絵にするイラストレーターの役割を行った。実践は、①リテラチャー・サークルの説明、②本の紹介・選択とグループ分け、③読書、④話し合い、⑤読書、⑥話し合い、⑦絵を描く、⑧発表という流れで行った（計3時間程度）。

当日の観察、読んだ本の内容を整理する手助けとなる役割シートと話し合い中の考えの変化を書き留めていく発言メモの記述と質問紙の結果から、以下の点が示された。第1に、公共図書館に求められている活動として、3時間完結型、ファシリテーターが活動をサポートする、全員でまとめとしてイラストレーターの役割を行う、発言メモの導入という4つの特徴を持った新しいリテラチャー・サークルのプログラムを提案し、プログラムの全体進行は問題なく、評価できるものであった。第2に、公共図書館において行う利点と課題として、初対面の人とコミュニケーションをとれること、図書館員による本の紹介が本を読む意欲の向上に繋がること、公共図書館で単独で行うには学習的要素が強いことの3点が示された。第3に、リテラチャー・サークルの読みへの気づきへの効果であるが、複数の役割において、役割に基づいた視点からの読みができていたことから、短期では読みにおける気づきへの効果があると考えられる。今後は、公共図書館におけるリテラチャー・サークルの教育的側面を抑えた形で、子どもたちが複数回参加することが期待できるプログラムの考案と、リテラチャー・サークルを継続的に行った際に本当に読書能力の向上が見られるかどうかを検討していくことが望まれる。

（指導教員 鈴木佳苗）